

桐原家の人々4

特殊恋愛理論



茅田砂胡

中央公論新社



D カ 口 挿
T ッ 絵 画
P ト

ハ 和 成
ン 瀬 か
ズ 久 お
ミ 美 り
ケ



1	7
2	15
3	35
4	46
5	66
6	84
7	115
8	143
9	170
10	183
11	224
12	229
13	234
あとがき	240



桐原家の 人々

4

特殊恋愛理論

その瞬間、何が起きたのか、本当に覚えていない。

昨日が小学校の卒業式だった。

今日は両親と一緒に朝から出かけたのだ。

妊娠中の母は久しぶりの家族での遠出にすっかりはしゃいでいた。

このところ、ずっと体調が優れなかったようだが、それもようやく収まったらしい。

「零れいも秋にはお兄ちゃんよね。弟と妹と、どっちがいい？」

と訊いてきたから、どっちでもいいよ、と答えた。本当は弟のほうがよかったけれど、母が女の子を

欲しがっているのを知っていたから、そう言った。

父の運転する車で家路を急ぐ頃にはすっかり眠くなっていた。

いつの間にか、後部座席に横になっていたらしい。車の窓から見える空はもう真っ暗になっていた。

その空よりもさらに黒く、道に覆おい被さるようになぞわめいているのは木の陰だ。

規則正しい間隔を空けて、街灯の光が現れる。

ほんの一瞬、視界に飛び込んで、あつという間に通り過ぎる、飛ぶように流れる光だ。眩まぶしくて眼を閉じた。

運転席の父の声がした。

「零は寝たのか？」

母がその声に応えて後部座席を振り返り、自分の顔を覗き込んだようだった。

「ええ、よく寝てるわ。疲れたんでしょね」

起きてる。そう言おうとしたが、起きているのは意識だけらしい。実際には声にはならなかった。

自分が寝ていると思った父は、何故か声を低めて、母に話しかけた。

「前から思っていたことなんだが、結婚写真を撮らないか？」

「えっ？ 結婚写真って、誰の？」

「何を言ってるんだ。ぼくたちのだよ」

「あなた……」

「テレビで見たんだよ。近頃、大きな結婚式場では、そういうサービスをやってくれるらしい。もちろん衣裳も貸してくれるし、髪もお化粧もきちんとしてくれる。その格好で写真だけ撮ってもらうんだよ。衣裳込みだから、写真代は少し高くなるけど」

「あなた……。わたしなら、いいのよ」

「いや、よくないよ。どうしてうちにはお父さんとお母さんの結婚式の写真がないのかって、この間、零に言われてね」

言ってる。

と思ったが、父のために黙っていいようと思った。

だいたい、言おうとしても声が自由にならない。

半分以上、眠りに落ちているようなのに、何故か、両親の言葉だけははっきりと耳に届いていた。

「今さらという気もするんだけど、やっぱり、何か記念になるものがあつたほうがいいんじゃないかと思うんだ。それとも……いい歳をしてそんな写真を撮るのは気が進まないか？」

「まさか。そんなことないわ」

母の声は少女のように弾んでいた。

「嬉しい。ぜひ撮りに行きましょうよ。それなら、わたしは打ち掛けよりウェディングドレスがいいわ。ただ、今からだと、お腹が目立つちゃうわね」

「まだ全然わからないじゃないか」

「それはそうだけど、どうせなら五月になってから撮りたいと思ったの。そうすれば、鈴蘭すずらんのブーケが持てるから」

「すずらん？」

「そうよ。ウェディングドレスで写真を撮るのなら、ブーケも必要でしょう？ 憧あこがれだったのよ。鈴蘭のブーケって」

「今でも手に入るんじゃないかな？ 薔薇ばらなんかは一年中あるみたいだし」

首を傾げた父に、母は笑ったようだった。

「そうね。早いほうがいいものね。それなら鈴蘭はやめて、白薔薇のブーケにしましょう。いつ撮りに行きましょうか？ 次のお休みにする？」

「いや、そんなに急がなくてもいいんだよ。鈴蘭が五月にしか手に入らないのなら、いつそ待とうか？ 別にいつ撮ったっていいんだから」

「あら、せっかくだもの。早めに撮りましょうよ。零と一緒に」

「零も？」

父の声には意外の響きがあった。

「結婚写真なのに、零と一緒に写るのかい？」

それはいやだ。と、半分寝ぼけた頭で思った。

ウェディングドレスを着た母親と写真に写るのはさすがに恥ずかしい。

幸い、母はそうした気持ちを察してくれたようで、笑って言った。

「男の子だもの。零と一緒に写るのはいやがるわよ。そうじゃなくて、あの子の制服がもうできているでしょう？ だから、入学記念に写真を撮ったらどうかしらと思ったの。そうすれば、一緒にお義兄にいさんのところへ送れるじゃない」

「そうか」

父は大いに納得したようだった。

「よし、決まりだ。早速、ぼくたちの結婚写真と、零の入学記念写真を撮りに行こう」

ひどく乗り気な父の声に、面倒くさいな、と正直、

思った。

両親の会話はそこで止み、車内はエンジンの静かな音に満たされた。

暗闇に響くその音が心地よくて、今度こそ眠りに落ちようとした時、母がためらいがちに口を開いた。

「ねえ、あなた」

「うん」

「わたしも、ずっと考えていたことがあるんだけど、もう、いいんじゃないかしら？」

「何が？」

「お義兄さんに会いに行っても」

「……………」

「大丈夫よ。うちの者だって、もう、お義兄さんの家を見張っていたりしないわ」

後部座席に横になったまま、思わず、ぱつちりと眼を見開いてしまった。

見張るといふ言葉が意識の隅に引つかかったのだ。普通の生活では滅多に聞かない言葉だ。誰が誰を

見張っているというのだろう。

「お義兄さんにもお義姉さんにもいろいろお世話になってるんだもの。きちんとご挨拶したいのよ。それとも……、あちらのお義父さまとお義母さまは、わたしたちのようなものが顔を出すことをお怒りになるかしら？」

「いや、そんなことはないと思う。あの義姉さんのご両親だからね。二人とも、ぼくたちのことを気に掛けてくれるって、兄さんもよく言ってる」

「よかった。それなら問題はないじゃない。会いに行きましょうよ」

そう、父には兄がいる。

いることは知っていても、顔は知らない。自分にとっては一度も会ったことのない伯父さんだ。

そもそも、自分には田舎がない。

夏休みが終わると、同級生の間ではどこへ遊びに行った、何をして遊んだという話になる。小学生のことだから、行き先は母親の実家か、父親の田舎で

あることが多かった。お正月明けなら、みんなして誰それからいくらお年玉をもらったという話になる。こういう時は親戚の多い子のほうが圧倒的に得で、零はその度に、どうして自分には田舎がないのかと両親に尋ねてきた。

母の答えは決まっています、

「お父さんとお母さんが生まれて育った家のことを、田舎って言うのよ。おじいちゃんやおばあちゃんは今も住んでいる家のことをね。でも、お母さんにもお父さんにも、この家の他に家はないし、零の他に家族はいないから、田舎もないの」

というものだった。

それなら、お父さんがいつも手紙を出している伯父さんは？ と尋ねると、

「伯父さんが住んでいる家は、お父さんが生まれた家じゃないのよ」

あっさり言われてしまった。

その母の話と、今の両親の話はだいぶ食い違う。

父もためらいがちに口を開いた。

「園子はどうなんだ？ その……お義父さんとはともかくとして、兄妹に会いたくないのか？」

「無駄よ。連絡しても。兄たちも妹たちも、父の怒りを恐れて、わたしには関わりとうとしないでしょうね。無断で会ったことが父にわかったら、とんでもないことになると思って、断ってくる。わかるのよ。昔のわたしがそうだったから」

「園子……」

「でも、お義兄さんは違う。あなたのことを本当に心配して、愛してくれている。うらやましいわ」

何だか、話がどんどん深刻になっている。じつと、耳を澄ませていた。

「お義兄さんのところにも、もうじき二人目のお子さんが生まれるんでしょう？ それにお引越しも控えているって言わなかった？」

「ああ。義姉さんの出産を待って引越すそうだ」

「どこへお引越しの？ 都内？」

「それはつきり言わないだよ。ただ、都内ではなさそうだったな。詳しい引つ越し先を教えてやるから、いい加減にこっちの連絡先を報せろってさ。でないと、次におまえが電話してきた時には、この番号は通じなくなってるって。——兄さん、あれは脅しおどのつもりだったのかな？」

「いつまでも我を張るなっておっしやりたいのよ。ね？　だから、ちようどいい機会じゃない。東京を離れたところにお引つ越しされれば、わたしたちがお義兄さんのお宅を訪ねても、父にはわからない。零だつて伯父さんに会わせてあげたいし、わたしは麻亜子まあこちゃんにも会いたいと思つてゐるのよ。もうずいぶん大きくなつたでしょうね。零と仲良くしてくれるかしら？」

「おいおい、勝手に話を進めるなよ」

「あら、あなたはお義兄さんに会いたくないの？」

「そんなことはない。ただ、やっぱり……こっちの立場を考えると顔を出しにくいじゃないか」

父の声には珍しく、力がない。これに応える母の声も、滅多にないほど厳しいものだった。

「わたしだつて同じことよ。実家があちらのお宅に何をしたかを考えると、なおのこと、そう。とても顔を出せないと、ずつと思つていたわ。——でも、あれから十四年になるのよ。零も中学生になる」

「うん。早いもんだな」

「わたしはあなたと零がいればいい。兄妹たちにも進んで会いたいとは思わない。わたしがいなくても、あの人たちの生活には問題はないはずだし、みんな幸せに暮らしているでしょうから。でも、あなたとお義兄さんはそうじゃないでしょう？　ご両親を亡くして以来、ずっと二人で支え合つて生きてきたんだつて、あなた、いつも言つていたじゃない。そのお義兄さんに会えないままで、本当にいいの？」

「それを言われると、辛いつらいな」

父の声は笑つていた。苦笑に近かつたと思う。

「仮に、もし仮に、実家に居所が知れたとしても、

わたしはかまわないと思ってるの。今のわたしはれっきとした大人で、あなたとは正式な夫婦なんだから。力づくでそのわたしを実家に連れ戻すというのなら、父のほうを法を犯すことになるわ」

「あの人が、そんな法律を気にするだろうか？」

「わかつてる。だから、そうなたら大声を出して、ご近所がみんな飛び出してくるような大騒ぎをしてやるつもりよ。父にとつて何より大切なのは世間体なのだから。きつと諦めて引き下がるわ」

父がおもしろそうに笑う氣配がした。

「いや、驚いたな。園子はいつの間にそんなに強くなつたんだ？」

「知らないの？『母は強し』なのよ。秋になればもう一人家族が増えるんだから」

母も楽しそうだった。

「そのせいかしらね。わたしたちは何も悪いことはしていないって、ようやく胸を張って言えるような気がするのよ」

「園子……」

「あの時まで……家を出るまで、父に逆らうなんて、思つてもみなかった。あなたと一緒になつて、零が生まれて、今まで本当に幸せだったのよ。でも……それでも、どうしても、わたしたちは結局は逃げているんだっていう思いが消えなかったの。——誤解しないでね。後悔しているわけじゃないのよ。ただ、どう言えばいいのかしら？ 何か、いけないことをしているような氣がして……」

「わかるよ」

運転しながら、父は力強く頷いたようだった。

「その罪悪感はおくもずっと感じていた。何も悪いことをしているわけじゃない。そう思おうとした。でも、あの時の園子は二十歳にもなっていなかった。お義父さんにとつて、おくは間違ひなく犯罪者だよ。殺されたつて文句は言えない」

話がどんどん穏やかではなくなってくる。

両親の言葉の意味を完全に理解していたわけでは

ないが、黙っていられなくなつて、つい声を出した。

それが最後だった。

「何の話？」

前席の二人は予想以上にびっくりしたようだった。

「零！」

「起きてたのか？」

「お父さん、誰に殺されるの？」

運転中にも拘かからず、父が真剣な顔で後部座席を振り返った。

「零。それは違うぞ。殺されても文句は言えないと言ったんだ」

「なんで？」

言いながら身体を起こした。同時に、真つ正面に、眩しく眼を射る車のヘッド・ライトを見た。

あっという間にその眩しい光は目の前に迫り――。

母が悲鳴を上げた。

父が何か叫んでハンドルを切ろうとした。

母はきれいな人だった。

遊びに来た友達が『おばさん』と呼びかけるのをためらったくらい、若い人でもあった。

それは父も同じだった。とても『おじさん』には見えない人だった。

背が高くて、運動が得意で、優しかった。小さい頃の自分にとって、父はいい遊び相手だった。

両親はとても仲が良かった。

思い出してみても、二人が喧嘩けんかしているところを見たことはない。小学校の中学年になった頃、友達

の両親が大喧嘩をするのを目の当たりにして、心底恐ろしいと思ったことを覚えている。

大人たちが互いに罵ののしりあう殺気だった声なんて、

その時、初めて聞いたからだ。

両親は小学校の卒業式に揃そろってきてくれた。

卒業式に父親が来るのは珍しかった。友達の中で、自分だけだったと思う。平日であることを考えれば、当然のことだ。周りのお母さんたちは父の姿を不思議そうに見ていたが、父も母も、そんなことは全然、気にしていなかった。

その両親は今、目の前の箱の中にいる。

白い布が掛かった、長い箱だ。

同じ大きさの二つの箱は、いつもの両親のように仲良く並んでいる。

それぞれの箱の上には菊きくの花束が載せられている。部屋中に、お線香のきつい匂いがしていた。

桐原零は椅子に座ったまま、ぼんやりと、両親の遺体が収まっている棺ひつぎを見つめていた。

いつからそうしているのか、そこがどこなのか、そもそも何が起こったのか、零にはわからなかった。車に乗っていたはずなのに、両親と話をしていたはずなのに、いつの間にか、狭くて暗い部屋にいる。どうしてこの部屋まで来たのか、どうして両親が目の前の箱の中にいるのか、理解できなかった。

（家に帰らなきゃ……）

不意にそんなことを考えた。そうだ。自分たちは家族そろって出かけているところだったのだ。

小学校を卒業した記念に、父が好きなドライブをかねて、母が前から見たがっていたサーカスを見に、港町へ足を伸ばした。帆船が帆を張るところも見えた。一日遊んで、たくさん買い物もした。晩御飯にはおいしい中華料理を食べた。

あとは家に帰るだけだったのだ。

『ふじみ荘』というアパートの二階が零の家だった。

玄関を入ってすぐのところが台所で、部屋は二つ。台所の奥が自分の部屋で、隣が両親の部屋だった。アパートを出ると、目の前の角に小さなたばこ屋があつて、小学校までは歩いて十分。

住宅街とは言つても、通学路には田圃や畑たんぼがあり、自転車で行ける距離に小川や空き地がある。

それだけが零の世界のすべてだった。

そこへ帰リたかった。

自分は今もうじき中学生になる。制服もできている。同じ小学校を卒業した友達ほとんど同じ中学に入ることになっているのだから。

早く家に帰らなくてはいけないのに、それなのに、両親はどうしてこんな箱の中にいるのだろう。

どうして起きあがってこないのだろう。

そう思いながら、同じ心のどこかで、両親はもう起きあがることはないのだと思つている自分がいることを、零は知っていた。

二人とも、もう決して、この箱から出てこない。



死んだからだ。

いいや、おかしい。そんなはずはない。

だって、それなら、もつと悲しいはずだ。

両親が揃って死んだのなら、たいへんなことだ。

こんなに悲しい、恐ろしいことは他にないのに、

自分は泣いてもいないのだから。そんなのは変だ。

(嘘^{うそ}みたいだ……)

そうだ。嘘なんだ。こんなのは。

でも、嘘だというなら、両親はどこにいる？

すると、自分の中の一人が呆^{あき}れたように指摘した。

何を言ってるんだ。二人はそこにいる。おまえの

目の前の箱の中にいるじゃないか。

同時に、もう一人がまったく別のことを言った。

いいや、違う。二人はこんなところにはいない。

さらに別の声がその声に賛成する。そうとも。両親

はこんな箱の中にいてはいけないのだ。みんな

一緒に家へ帰る途中だったのだから。

さらに呆れたような声がする。

いい加減に認めろよ。二人はここにいる。死んで、動かなくなつて、この箱の中にいるんだ。

朦朧^{もうろう}とした意識の中で、大勢の自分が一斉に声を

あげているような感じがした。一番、考えなくては

いけない本当の自分は、その大勢の自分たちの声を

黙って聞いているだけだった。

『家に帰りたい』

その思いだけが強く自分を支配していた。

もつと正確に言うなら『家』にはではない。自分の

知っている世界に、いつもの日常に帰れたかった。

毎日、学校へ行つて、友達と遊んで、週に何度か

塾に行く。塾と言つても、近所のおじさんが自宅で

開いている小さな学習塾だが、結構、楽しかった。

家へ帰れば晩御飯だ。母は時々、書き物の内職に

熱中しすぎて、食事の支度を忘れることがあつて、

自分が帰つてから慌^{あわ}てて夕食をつくり始めることも

あつた。そんなときは簡単な晩御飯になつたけれど、

母は料理の得意な人だった。カレーやちらし寿司、

ハンバーグにシチューといった定番の料理も、母がつくると、できあいのものとは全然違う味になった。今の季節だと、さわらの煮付け、菜の花の芥子からし和え、筍御飯にロール・キャベツなんかもおいしかった。

父はよほどのことがない限り、夕食までには家に帰ってくる人だったから、晩御飯はたいてい三人で食べた。

そのいつもの生活へ帰りがかった。

それなのに、自分はこんな暗い部屋で、ぼんやり座って、両親の棺を見ていることしかできない。

本当は、心のどこかではわかっていた。

自分は二度と、日常そとへ帰ることはできないのだということを。

わかってはいても、では、どうすればいいのか、両親が何も答えてはくれない今、自分は何をすればいいのか、その肝心なところが、ぽっかりと抜けてしまっていた。身体はどこかに、実際に穴が開いて

いる気がした。

「零くん……?」

弱々しい声だった。

今までも何度か名前を呼ばれたが、この声は少し、それとは感じが違った。

振り返ると、男の人が立っていた。知らない人だ。でも、どこかで見たことのあるような気がした。

その人は零の座った椅子いすの前にしゃがみ込むと、今にも泣き出しそうな声で言った。

「迎えに来たよ。おじさんと一緒に帰ろう」

零はほとんど無意識に、ぼんやりと問い返した。

「おじさん、だれ?」

後ろのほうで、誰かが『あら、しゃべったわ』と言うのが聞こえた。呆れたような感じの声だった。

『驚いた。治療する間も、ここへ連れてきてからも一言もしゃべらなかつたんですよ』

『そうそう。名前と住所を言っただけで、後は何を聞いても答えなくて。困ってたんです』

答えなかったのではなく、答えられなかったのだ。何かひそひそ声で言われているのはわかっていた。『トラックの運転手は相手の車がセンターラインを越えてきたと主張しているらしい……』

『それじゃ、この子の父親の過失ですか？』

『かもしれんな。前席の二人は即死だ。仏さんほとけは何もしゃべってくれん。生き残ったこの子はずっとこんな調子だとなれば、こりゃあ、トラック側の言い分が通るだろうな』

『亡くなった人たちには気の毒だけど、損害賠償を請求するって、トラック側は主張しますよ』

『それなんだよなあ。まさかこの子に支払い能力は期待できないし、かといって、この子の両親に親戚らしい人間は一人もいない』

『両親ともですか？　なんか、怪しいですね』

『そうなんだ。今時、天涯孤獨てんがいくなんて人間は滅多にいるもんじゃないんだが、旦那の肉親はもちろん、女房の実家もわからないときてる。この子から聞き

出そうにも、これじゃあどうにも……』

『引き取り手もないわけでしょう？　となると、この子は施設行きですかね』

恐かった。

何かが父親のせいになれようとしている。それはうすうす感じていた。自分が何か問ただい質されようとしていることもだ。ひどく不安で、恐ろしかった。だからといって自分に何ができただろう。

今の零は口を開くこともできない。身体も自由に動かない。考えることさえ放棄していたのだから。

時折、目に入る人の顔は、どれもこれも人間には見えなかった。のっぺらぼうの白い仮面の中で唇だけが笑っているように見えた。背筋がぞつとするような笑いだった。そうして、その仮面たちは猫なで声で話しかけてくるのだ。

零はあまりにも子どもで、あまりにも弱かった。

その笑いが恐ろしいという気持ち言葉を伝えることも、表情や仕草で訴えることもできなかった。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。